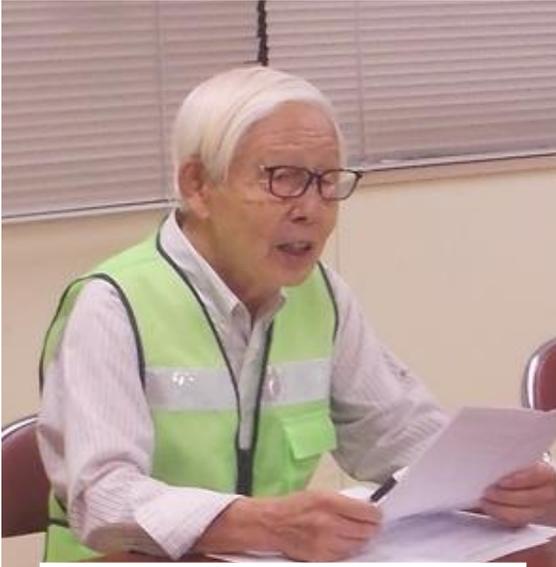


## ● むかしを語る会(地域活動部会・広報部会による合同開催)



▲中野光弘さん

7月23日(火)午後7時から朝日会館において、「むかしを語る会」を開催しました。参加者は、主に地域活動部会・防犯防災部会・広報部会からの14名です。

講師は、地域活動部会部長の中野光弘さんです。

中野さんは生まれも育ちも昭島市で、古くは中神のあまり知られてない、昔の地理的な情景を描きながらお話を進めて下さいました。

内容としては、昭島台幼稚園南側周辺の傾斜地帯から、湧き水があふれ出ていたと話されました。その南側方面には当時、諏訪神社の湧き水が滝のように流れ出ていたそうです。

その湧き水は諏訪神社の池を経路として境内から出ると、大きなお屋敷沿いに流れ、情緒豊かな黒堀が数メートル続いています。



▲宮沢の用水路と屋敷の黒堀

このような事から平安末期に功績のある武蔵野武士守護が領地として納めていたことが推測されます。

そして古くから宮沢集落に住む人々の用水路として、生活の糧となり日々日常を潤してきました。

用水路を流れる湧き水の水源を調査すると、中神の水は、宮沢とは違う水源場所から出ていることがわかります。熊野神社からみて、西上の石垣下から水が出ています。

数年前はワサビを栽培出来る、程よい湧き水が流れていました。

ここ最近の水の量が少なくなっています。

中神集落はこの水源を活用して、人々が暮らしてきました。



▲20年前撮影のわさび田風景、現在は栽培されてません

宮沢・中神はそれぞれ独自の水源を元に、集落を形成していたことを中野さんが詳しく話されました。

その二つの用水路は、さらに段丘下の用水路で合流して、田んぼの水として使用され、多摩川に流れて行きます。

中野さんが子どもの頃に、とても鮮明に覚えている出来事として、生活用水路周辺の草陰に、それはもう大きな蛇青大将がとぐろを巻いていたそうです。

やはり水源とその湧き水がもたらした、命の象徴であったようです。

蛇は神様の使いとして、丁重に扱い合掌して水源に逃がしたそうです。

(語り/ 中野光弘) (取材 / 広報部会 幡垣 誠)